



# 師匠の たち



川崎ゆきお

師匠とその弟子との対話だが、この師匠、それほど賢者ではない。だから、その話も適当で、聞いている側も賢くならない。弟子はそれで非常に気楽に、この師匠から話を引っ張り出すことが出来るのだが、聞いたからといってあまり役に立たない。

「たちじゃろうなあ」

「たちですか、師匠」

「ああ、たちの悪い奴とか、たちの悪い性格とか言うだろ」

「言いますねえ。それが何か」

「今日は人間について考える」

「はい、よろしくお願いします」

弟子が問いかける前に、師匠の方から問題定義するので、弟子もやりやすい。聞いた限り、聞かなければいけないが、言いたしたのが師匠なので、聞いてやる程度ですむ。どうせ聞いても聞かなくても似たような話なので、聞き賃が欲しいほどだ。

「たちの悪い人間はどこまでいっても悪い。これは修行では治らん。徳をいくら積んでも悪徳となる」

「悪徳ですか」

「ああ、だから、あくどい奴、というじゃろ」

「そうなんですか。始めて聞きました」

「徳を積まなくても悪徳者にはなれる」

「徳が少しもないから悪徳になるのですね」

「知恵のない欲張りなどは素直なもので始末がいい」

「はい。それと、たちとはどう関係しますか、師匠」

「たちは変えられん。最初からたちの悪い奴は、いくら徳を積んでも悪徳者にしかなれん」

「そんな、師匠、それでは修行の意味がありません」

「だから、修行しても、根が悪ければ、悪い方にしか育たん」

「それはきつい話ですねえ」

「まあ、聞け、それは言っておるだけのことでな」

「現実はそうでないと」

「ただなあ、わしの幼友達で悪い奴がおってなあ。それが聖人になりよった」

「ああ、そういう話、よく聞きますよ。反対側に出るのでしょ」

「それは通説でな。わしは、その幼友達を信用しとらん。コイツは昔からたちの悪い奴でなあ、だから、聖人になっておっても、信じられん。コイツは嘘をついておるとしかみん」

「そんな了見の狭い」

師匠はその聖人の名を明かす。

「それは超一流の聖人様ですよ。それに大賢者様です」

「わしの幼友達じゃ」

「え、そうだったんですねえ。師匠のこと、それで見直しました」

「何故じゃ」

「だって、大聖者様とお知り合いだったのですから」

「しかし、違う」

「何が」

「あいつは嘘じゃ」

「嘘じゃないですよ。誰もが認める徳の高い人です。高德者です」

「わしは、幼き頃、あいつに色々と意地悪をされた。人格のかけらもない男よ」

「だからこそ、その反動で、徳を得たのではないのですか」

「いや、そうじゃない。徳者は最初から徳者でな。そういうたちの持ち主なのじゃよ」

「また、たちですか」

「そうじゃ」

「それは納得出来ませんよ。師匠の偏見です」

「いや違う。わしには見える。あの聖人の裏をな。誤魔化されはせん。わしは知っておるのだからな」

「今日は、あの大聖人様の悪口を言う日ですか、師匠」

「今は、隙を見せんが、そのうちボ口を出す」

「失礼な話ですよ」

その大聖人と、この師匠のランクは五つほど違う。凄い差が出てしまった。

「それは師匠の妬みですよ」

「わしを諭す気か、君は」

「そうじゃありませんが」

「まあ、いい、反論を許そう」

「はい、お願いします。そこが師匠のいいところです」

「わしの自説じゃ、たちは変わらぬと、いつか証明されるであろう」

弟子は、この師匠と大聖人とが対面する日を楽しみにしている。そのことを師匠に言った。

師匠は、そのときは、その大聖人様は脂汗をかくだらうと豪語した。しかし、豪快な言い方ではなく、何となく心細げに。

それが、この師匠のたちだらうと、弟子は思った。

了